

# 高等学校家庭科における福祉・高齢者学習についての一考察 —高校生の高齢者観との関わりから—

山 川 恵 美・倉 盛 三知代

(和歌山県立和歌山西高等学校) (和歌山大学教育学部)

On the Study of Welfare and Aged Person in Home Economics of Senior High School  
—The Views toward Aged Person of Senior High School Students—

Emi YAMAKAWA・Michiyo KURAMORI

Nishi Senior High School in Wakayama Prefecture Faculty of Education, Wakayama University

2002年10月11日受理

## I 緒 言

わが国の高齢化は、これまで以上のスピードで進展している。この高齢社会の中で国や地方自治体などによる社会福祉のさまざまな施策が検討されてきている。しかし国や地方自治体からの制度だけでは、解決できない問題が山積しており、社会福祉の諸制度が充実しても、個別の生活問題において解決できないことが多く存在する。古川<sup>(1)</sup>が「給者サイドの社会福祉から利用者サイドの社会福祉」へと論じているように、今後、福祉問題を考える場合は、福祉サービスを利用する側、すなわち生活者としての視点から考えることが重要であると思われる。

また、1999年3月に学習指導要領が改訂され、21世紀の教育は、ゆとりの中に「生きる力」の育成をめざすことが提示された。家庭科教育においては、男女共同参画社会の推進や少子高齢化等への対応が重視されており、家族や生活の営みを人の一生とのかかわりの中で総合的にとらえ、男女が協力して家族や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てることを目標としている。そして家族・家庭について理解し、生活を総合的に認識し、課題を解決する問題解決能力などを育成するために自ら学び、自ら考える教育への転換を図ることを提言している。これらの観点をふまえ、生活者としての視点から様々な問題を解決するために、また家庭科教育において福祉教育がどのような視点を持つべきかを検討をおこなったので報告する。

## Ⅱ 研究の枠組み

調査の枠組みは、図1に示す通りである。研究では、高齢者観に関しては、「高齢者のイメージ」の他に「親しみ関心」「支援意識」「高齢者についての知識」についても調査を行い、また学習意欲・関心については、「学習方法」や「学習内容」や「ボランティアへの参加」についても調査を行ったが、今回は、紙数の関係で「高齢者イメージ」から捉えた高齢者観と祖父母との交流経験ならびに学習への興味・関心に絞って報告する。本報告の目的にそって、次のような仮説をたてた。

仮説1 祖父母との交流関係が多いほど、福祉・高齢者観が高いだろう。

仮説2 祖父母との交流関係が多いほど、福祉・高齢者学習への興味・関心は、高いだろう。

仮説3 福祉・高齢者観が高いものは、福祉・高齢者学習への興味・関心は、高いだろう。

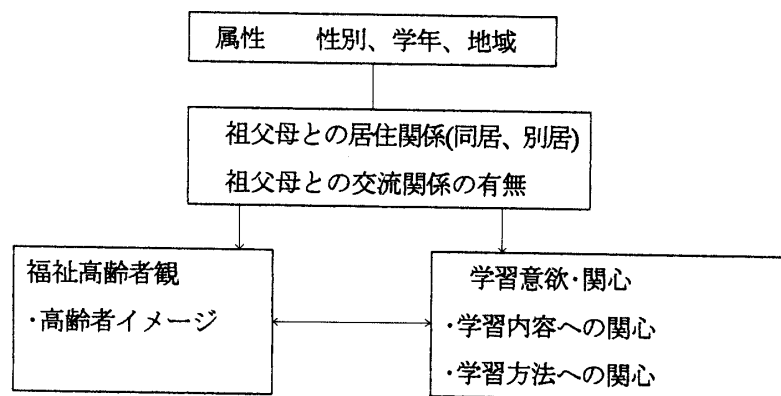


図1 調査項目の関連

## Ⅲ 調査方法

調査対象者は、和歌山県の高齢化が県平均である北部地域（和歌山市）と高齢化の高い南部地域の普通科の高等学校生徒で、家庭一般を現在履修している生徒合計497名である。調査は、2000年7月に、自記式質問用紙による集合調査を実施した。回収率は93.1%であり、うち有効回答率は99.4%で、分析対象数は、北部282名、南部213名合計495名である。集計にあたっては秀吉 Pro for Windows を使用し、有意差検定はカイ2乗検定により行なった。

調査項目の柱は、図1に示すとおりである。

## Ⅳ 調査結果及び考察

### (1) 基本的属性

性別、学年、地域について、性別は、男55.2%、女44.8%、学年は、1年35%、2年65%、地域は、北部（高齢化が県平均の地域）57%、南部（高齢化が高い地域）43%である。性別は、ほぼ半々程度であるが、学年については、家庭一般を現在履修している学年としたため、履修状況が異なり、学年が多少偏った結果となった。

祖父母との居住関係については、同居は29.5%、別居は65.5%と調査対象者全体の約2/3が別居を占めている。家族の形態も核家族化していて、地域による居住状態の違いは、表1に示すとおり差はなかった。

表1 地域と祖父母との居住状態

N=494 人	合計	北部	南部
同居	100%	56.2%	43.8%
別居	100%	58.0%	42.0%
祖父母はいない	100%	50.0%	50.0%

祖父母との交流について、高齢者と同居している高校生の場合、よく話をする生徒は53.5%あり、たまには話をする生徒が37.6%、ほとんど話をしない生徒が8.9%であり、9割以上が祖父母と話をする。しかしながら、10%弱の生徒は、あまり話をしない状態である。高校生は青年期であり成人期へ移行の時期でもある。身体的変化だけでなく精神的成長の時期であり、自己の内面について葛藤や模索する時期である。そのためか言葉数も少なくなる場合もあると推察される。

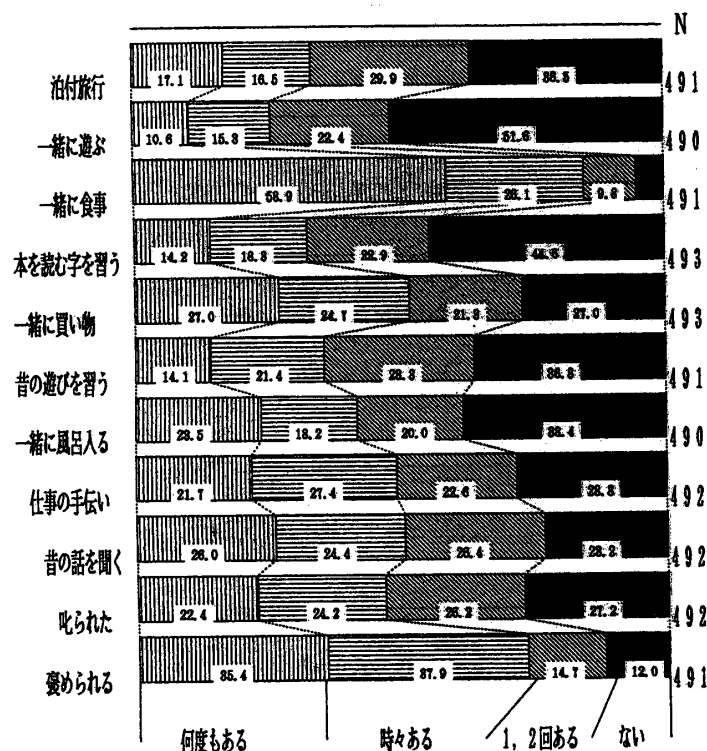


図2 父母との交流

次に小さい頃からの交流についてであるが、図2より「一緒に食事を作ったり食事をしたり」「何かをして褒められた」等は交流の中で多く経験しているが、「ボール投げや縄跳び等をして一緒に遊んだ」「本を読んでもらった」「字の書き方や読み方を習った」等の経験がない生徒が多く見られる。日常生活における交流の状態を家族形態から考えると、祖父母よりむしろ父母との交流の方を多く経験しているのではないかと推察される。また「昔の話を聞いた」「昔の遊びを教えてもらった」などを経験していない生徒が全体の約1/3程度あり、生活文化の伝承が懸念される。

## (2) 高齢者観

高齢者のイメージについてはSD法を用いて測定を行った。SD法を用いた先行論文<sup>2-9)</sup>では老人に対するネガティブなイメージが若者の中に存在し、小・中学生は、肯定的イメージを抱いていると述べている。しかし高校生についてのSD法を用いた研究は数が少ない。本論文では、高校生について主成分分析を行ったところ中野らの調査<sup>8)</sup>と若干2つの項目で違いがあるが、2つの主成分が抽出された(表2参照)。そのため中野らのSD項目を用いることとした。SD項目の形容語の否定的な極から順に1点から5点として配点し、3点を中立点とした。そして高校生のSD項目の平均値プロフィールを求めた(図3参照)。

表2 主成分分析より得られた二主成分と因子負荷量

主成分		因子負荷量	主成分		因子負荷量
第一主成分	SD11 悪い・良い	0.6887	第二主成分	SD17 弱い・強い	0.3578
	SD1 冷たい・暖かい	0.6366		SD13 暇そう・忙しそう	0.3375
	SD4 ひどい・素晴らしい	0.6198		SD18 鈍い・鋭い	0.3282
	SD12 だらしない・きちんとした	0.5998		SD15 遅い・速い	0.3115
	SD10 邪魔をする・手伝ってくれる	0.5936		SD16 小さい・大きい	0.2313
	SD3 正しくない・正しい	0.5857			
	SD14 愚かな・賢い	0.5853			
	SD2 悲しい・うれしい	0.5771			
	SD6 病気がちな・元気な	0.4146			
	SD7 きたない・きれい	0.4098			
	SD5 醜い・美しい	0.3568			
	SD8 貧乏・お金持ち	0.3513			

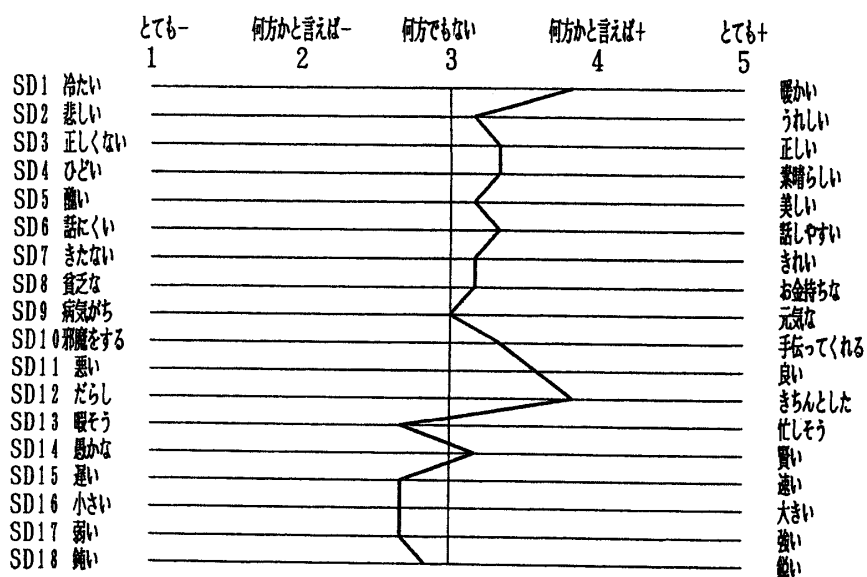


図3 高校生の高齢者のイメージ平均値プロフィール

全体的には、肯定的イメージを持っていると考えられ、「冷たい・暖かい」「だらしない・きちんとした」の項目には、肯定的に答えた生徒が多く、「暇そう・忙しそう」「鈍い・鋭い」「遅い・速い」「弱い・強い」「小さい・大きい」などは否定的であるが、比較的ニュートラルに近い否定的である。中野らが分析した小・中学生との比較を行ってみた。中野らの調査ではSD項目8の「貧乏な・お金持ち」が示されていない。中野らの論文と比較するため、SD項目8を省いて比較を行うこととする。図4は中野らが求めた小・中学生のグラフと本調査の高校生との合成図を作成したものである。

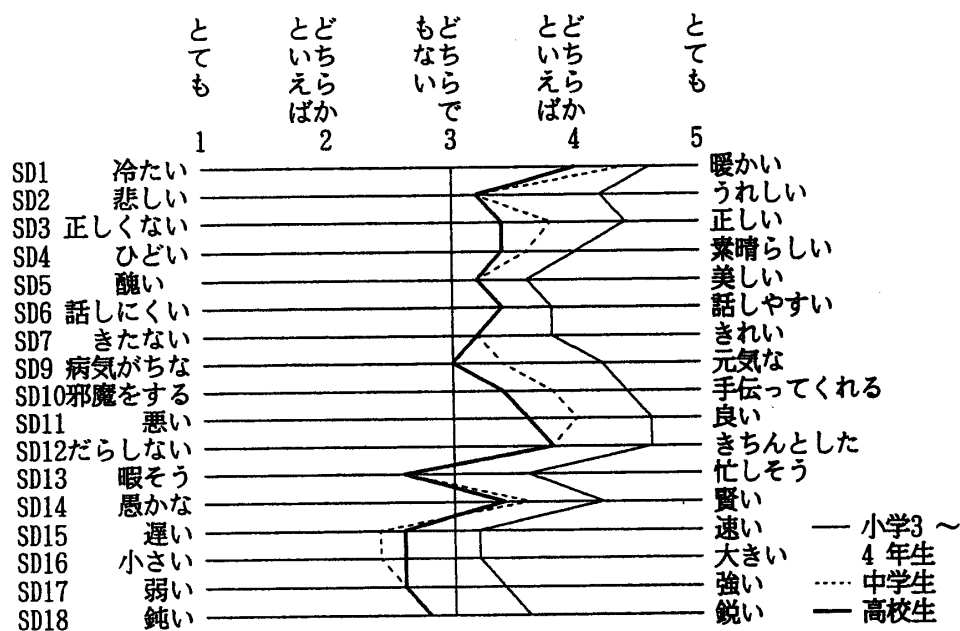


図4 高校生のイメージ平均値プロフィール  
(小・中学生は、中野いく子他「小学生と中学生の老人イメージ」社会老年学39P16)

図より小・中学生と比較すると高校生の方がやや否定的なイメージを示す傾向がみられる。「小・中学生は特に『暖かい』『正しい』『良い』『きちんとした』などでは、相対的に高い評定を得ており、これらが老人の肯定的イメージを強く表す」と中野ら<sup>8)</sup>は述べているが、今回の高校生の場合は、「暖かい」「きちんとした」を除いて「どちらでもない」という中庸な回答を示しているものが多い。小・中学生の場合は高齢者に対してのイメージが明確で強く表現し、高校生になると高齢者のイメージがだんだん画一的、一般的なイメージになってきている。また高齢者へのいたわりの気持ちが表れて、イメージの中に強く否定したり、肯定したりではなく、どちらかと言うと中庸なイメージを思い描き、高齢者への見方も年齢の増加とともに変化してきているように考えられる。

次に、高齢者のイメージの構造を把握するために主成分分析を行った。その結果2つの主成分が抽出された。第一主成分に負荷が高い項目は「悪い・良い (0, 6887)」「冷たい・暖かい (0,6366)」

「ひどい・素晴らしい (0,6198)」「だらしなない・きちんとした (0, 5998)」「邪魔をする・手伝ってくれる (0,5936)」である。第二主成分に負荷が高い項目は、「弱い・強い (0, 3578)」「暇そう・忙しそう (0, 3375)」「鈍い・鋭い (0, 3582)」「遅い・速い (0, 3115)」「小さい・大きい (0, 2315)」であった。第一主成分は高齢者の人格を総合的に「評価」する因子であると考ええる。第二主成分は力や動きを表す「活動性」とする因子と考える。次に中野らの報告と、今回の結果を比較してみると、ほぼよく似た結果であった。中野らの報告でも2つの主成分が抽出され、「病気がちな・元気な」のみが第二主成分に含まれていた。そこで今回の平均値と比較するために中野らの報告された分析結果より「病気がちな・元気な」を第二主成分とし、「貧乏・お金持ち」を省いて主成分項目の平均値を求めた(表3参照)。表3より両主成分の平均値は学年が上がるにしたがって低くなる傾向を示している。即ち高校生は、中学生より、さらに小学生より、否定的な高齢者イメージを抱いていることがわかる。また第一主成分の「評価」より第二主成分の「活動性」の方が小・中・高校生とも否定的にイメージを抱いていることがわかる。第一主成分の「評価」については、全体的に肯定的イメージを示していて、「評価」の側面では総合的に認めているように思える。しかし第二主成分の「活動性」の方は、中学生・高校生がやや否定的に捉えている。このことは、中学生・高校生の祖父母のほうが小学生の祖父母より平均年齢も上がり活動力は落ちていくことからすると考慮する必要があるかもしれない。

表3 主成分の項目の平均値

	高校生	小学生	中学生
第一主成分	3.47	3.96	3.58
第二主成分	2.27	3.27	2.72

(小・中学生は、中野他「小学生と中学生の老人イメージ」社会老年学No.39 p17より引用)<sup>8)</sup>

### (3) 基本的属性と高齢者観との関連

高齢者のイメージSD項目と基本的属性との関連について述べる。

高齢者のイメージを得点化するため、「とても否定的」を1点、「どちらかといえば否定的」を2点、「どちらでもない」3点、「どちらかといえば肯定的」を4点、「とても肯定的」を5点とし、18項目を合計した。さらに合計した点(18点～90点)を3等分し、18～42点を「否定的」、43～68点を「どちらでもない」、69～90点を「肯定的」とした。

高齢者のイメージSD項目と「地域」「性別」「居住状態」の関連についてクロス集計を行ったが、それらの間に有意差は見られなかった。

次に高齢者のイメージSD項目と「祖父母との交流」についてクロス集計を行った。「祖父母との交流」を現在の交流と過去の交流とに分けて検討をおこなう。高齢者のイメージSD項目と現在

の交流「同居の祖父母との会話」に5%の有意差が見られた(図5-1参照)。また、高齢者のイメージSD項目と過去の交流「小さい頃の祖父母との交流」に0.5%の有意差がみられる(図5-2参照)。現在の交流では、会話頻度によって高齢者の肯定的イメージが形成されることがわかった。また、現在の交流と過去の交流とでは、どちらも有意な傾向がみられたが過去の交流により高齢者のイメージを肯定的につくりあげるものがあるのかもしれないと思われる。さらに「小さい頃の祖父母との交流」の各項目にクロス集計を行ってみた。中でも特に有意差が顕著に見られたのは、「昔の話を聞く」「ほめられた」「仕事の手伝い」「本読みや字の書き方を学ぶ」「昔の遊びを教えてもらう」等である。これらは、祖父母からの意図的な交流であり、交流の「質」が祖父母に対するプラスの態度を形成し、高齢者への肯定的イメージを作りあげるのではないかと考える。

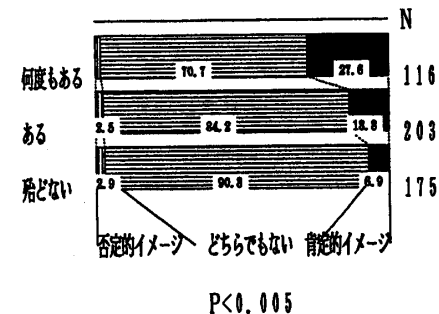
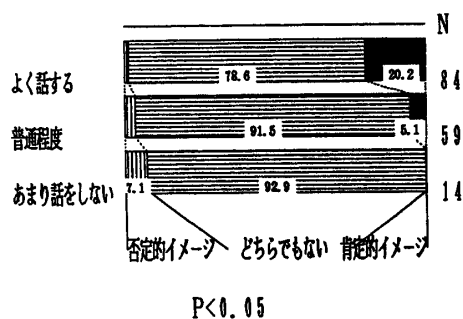


図5-1 高齢者イメージと会話

図5-2 高齢者イメージと小さい頃の交流

#### (4) 学習への意欲・関心

学習意欲・関心については、「学習方法への関心」「学習内容への関心について検討した。

##### 1) 学習方法への関心

学習方法への関心については、図6に示すように「施設訪問や手伝い等の体験学習」「車椅子等の模擬体験学習」「高齢者に教えてもらって何かを作る」等の項目については約半数の生徒が関心を示しているが、「調査・研究」「ビデオや映画の鑑賞」「高齢者についての講演」等は、約7割の生徒があまり関心を示さず学習への興味関心の無さがわかる。

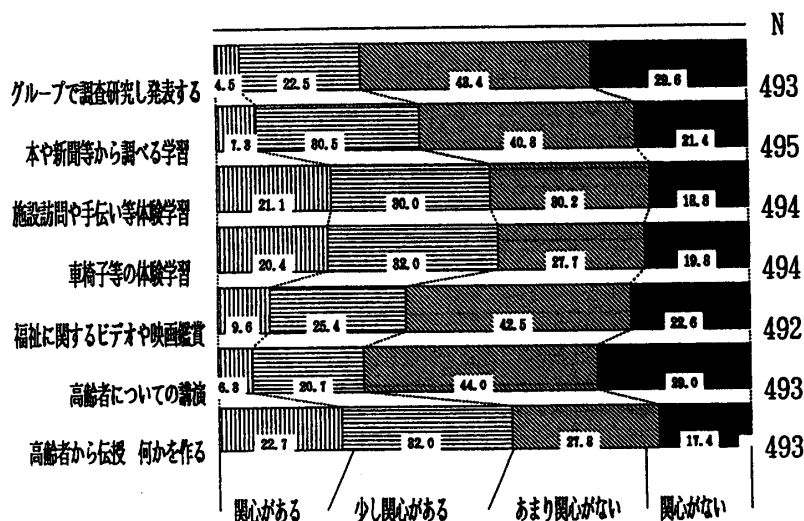


図6 高齢者についての学習方法

## 1) 学習内容への関心

学習内容への関心の度合いについては、図7に示すように、それぞれの項目間での関心度の違いはあまり顕著に見られない。またどの項目にも1割程度の生徒が全く関心を示さないという結果があらわれていて、高齢者の学習を実施する際にいかに意欲、関心をひきだすかの導入の大切さを感じる。今回の学習指導要領の改訂で、「家庭総合」の教科では「高齢者の生活と福祉 ア高齢者の心身の特徴と生活、イ高齢者の福祉、ウ高齢者の介護の基礎」が内容項目の柱とされている。その中で高齢者の心身の特徴や高齢者の自立については、高齢者福祉の基本的な理念やサービスの理解すること、また介護の基礎で、食事、着脱衣、移動などのうちから選択して実習させることが示されている。今回の調査では、高齢者の心理や社会福祉、介護の方法などにやや興味・関心がみられることは、指導要領の改訂で示めされている内容と一致する面があり意欲的にこれらの学習に取り組むことが期待される。また生活に密着した生活文化などにもやや興味・関心がみられることは総合的な視点で先人の知恵や文化について取り組めるのではないと思われる。

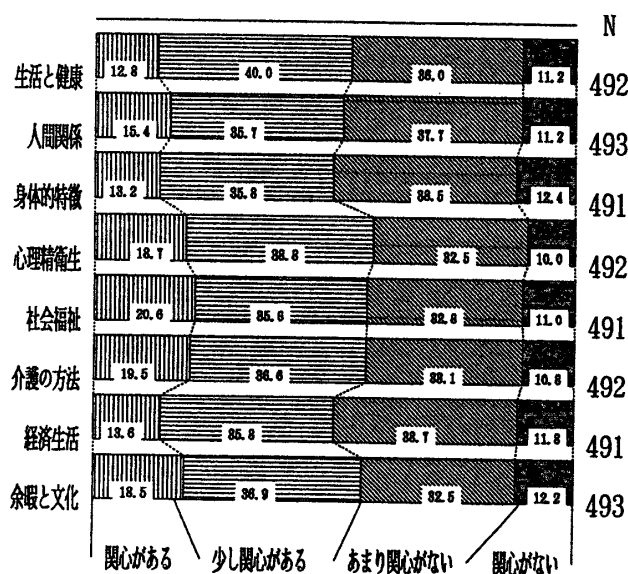


図7 学習内容への関心

## (5) 基本的属性と学習への興味・関心との関連

学習への興味・関心について基本的属性との関連についてみる。学習への興味・関心を「学習方法への関心」と「学習内容への関心」とに分けて考える。

### 1) 学習方法への関心

学習方法への関心を調べる7項目のそれぞれについて、「関心がある」を1点、「少し関心がある」を2点、「あまり関心がない」を3点、「関心がない」を4点とし、7項目を合計する。7～28点まで3つに分け、7～13までを「さまざまな学習方法に関心がある」、14～20までを「学習方



図8-1 学習方法について関心と地域性との関連

$p < 0.005$

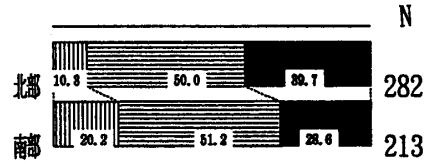


図8-2 学習方法について関心と性別との関連

$p < 0.005$

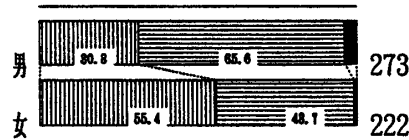


図8-3 学習方法について関心と現在の会話との関連

$p < 0.005$

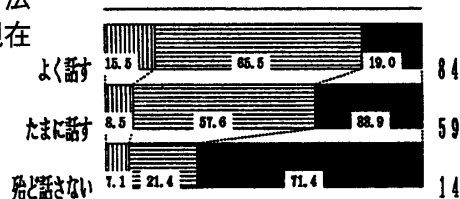
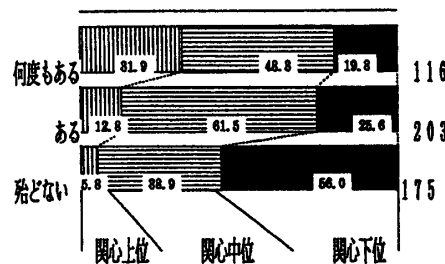


図8-4 学習方法について関心と小さい頃の交流との関連

$p < 0.005$



法への関心は中程度」、21～28までを「学習方法への関心は低い」とし、基本的属性とクロス集計を行った。「学習方法についての関心」と「祖父母との居住関係」との間には、有意な傾向は見られなかった。しかし、「地域性」、「性別」との間にそれぞれ0.5%の有意差があった（図8-1、図8-2）。「地域性」との関係では、学習方法について、北部より高齢化率の高い南部の方に関心が高い傾向が見られ、性別では、男子に比べ女子に関心が高い傾向がみられた。荒井らの報告<sup>10)</sup>には女子は男子より福祉・高齢者学習の意欲が高いと述べられているが、同様な結果が得られたことになった。次に「学習方法についての関心」と「祖父母との交流」のクロス集計を行った。現在の祖父母との交流では、「同居の祖父母との会話」で0.5%の有意差があり、また過去の祖父母との交流「小さい交流」でも0.5%の有意差があった（図8-3、図8-4）。即ち祖父母との交流が多い程、福祉・高齢者学習に関心が高いことがわかる。さらに、過去の祖父母との交流「小さい頃の交流」の内容項目のなかで特に強くその傾向が見られたのは、「祖父母から昔の遊びを覚えてもらう」「祖父母の仕事の手伝い」「祖父母から昔の話を聞く」「祖父母に褒められた」の項目である。昔の遊びや昔話を聞くことは、祖父母が孫に対しての愛情や思いやり等の特に意図をもった交流であり、文化を伝えようとする恣意的な交流の方向性が伺える。また聞く方も祖父母のこのような気持ちを受け入れ、高齢者に対して、尊厳や親しみが培われてきたのではないだろうか。そのことが福祉・高齢者学習の関心にも繋がっていると考ええる。

また、この学習方法の中でも「高齢者に教えてもらって何かを作る」にその傾向が強く見られ小さい頃、祖父母からの生活文化の伝達が影響しているのではないだろうか考える。「仕事の手伝い」も同様に祖父母と一緒に仕事を手伝うことで生活の中から様々な伝統や文化を受け継ぎ、祖父母と孫の心の交流が高められる。また一緒に仕事を手伝うことは、昔話や遊びを伝授する地域の生活文化の伝承とは違った、個々の家庭の生活習慣や人間関係の中から生まれる家庭生活の伝承であり、さらに「褒められた」ことの多い生徒の方が福祉・高齢者学習に関心を強く持って

いることから、交流の「質」、特に精神的な繋がりや信頼関係が、大きく高齢者に関する学習に影響することがわかる。

## 2) 学習内容への関心

学習内容への関心を調べる8項目のそれぞれについて、「関心がある」を1点、「少し関心がある」を2点、「あまり関心がない」を3点、「関心がない」を4点とし、8項目を合計する。8～32点まで3つに分け、8～15までを「様々な学習内容に関心がある」、16～24までを「学習内容への関心は中程度」、25～32までを「学習方法への関心は少ない」とし、基本的属性とクロス集計を行った。「学習内容についての関心」と「地域」や「祖父母との居住関係」との間に有意な関連は見られなかった。「学習内容についての関心」と「性別」では0.5%の有意差があり、学習内容への関心の高い者に女子が多いことがわかった(図9-1)。特に学習内容についての個別の項目とクロス集計を行うと「介護の方法」と「性別」とに有意な関連が見られ、女子の興味・関心が、「介護の方法」にあることがわかる。現状では、介護に関わっている者の多くが女性である。高校生の女子もこのような現状を認識しているのかも知れない。しかし、今後在宅介護が進む中、女子だけの問題ではなく社会全体の問題として捉える必要がある。また家庭科学習における「ジェンダー」を視点とした検討も必要である。次に、「学習内容についての関心」と「祖父母との交流」のクロス集計を行った。現在の祖父母との交流「同居の祖父母との会話」で1%の有意差があり、また過去の祖父母との交流「小さい頃の交流」でも0.5%の有意差があった(図9-2、図9-3)。即ち現在の交流では、祖父母との会話によるコミュニケーションの存在が学習にも影響することがわかる。また過去の祖父母との交流「小さい頃の交流」においても特に「褒め

図9-1 学習内容への興味・関心と性別の関連

$p < 0.005$

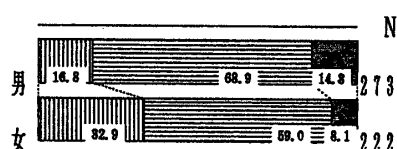


図9-2 学習内容への興味・関心と会話の交流の関連

$p < 0.010$

よく話す  
たまに話す  
殆ど話さない

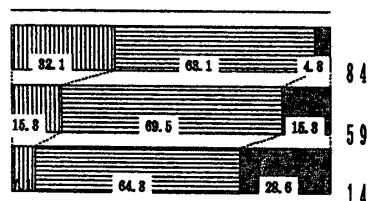
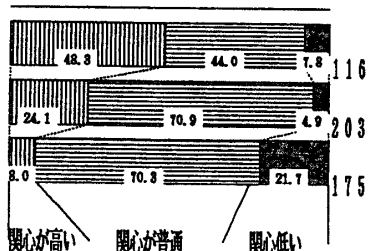


図9-3 学習への興味・関心と小さい頃の祖父母との関連

$p < 0.005$

何度もある  
ある  
殆どない



られた」「昔の話を聞いた」に有意な関係があり、学習内容に関心が高いほど高齢者と質的交流の度合いが高い傾向が伺える。学習内容の項目別と交流関係についてクロス集計を行った結果、「高齢者の生活と健康」「高齢者との人間関係」「余暇と文化」に特に有意な関連がみられ、交流の多い者は学習内容項目のなかで、高齢者との精神的関わり方や高齢者からの生活文化的な学習内容に関心が高いことがわかる。

## (6) 福祉高齢者観と学習への興味・関心との関連

福祉高齢者観と学習への興味・関心との関連についてみてみよう。福祉高齢者観は、高齢者のイメージ「SD項目」を、学習への興味・関心については、「学習方法への関心」と「学習内容への関心」を取りあげクロス集計を行った。その結果は、いずれも0.5%の有意差があり高齢者のイメージを肯定的に捉えている生徒は、福祉・高齢者学習に興味・関心が高いことがわかった(図10-1、図10-2)。高齢者イメージSD項目のそれぞれの項目と個別に「学習方法への関心」「学習内容への関心」とクロス集計を行った。その中で特に学習方法や内容に関心が高いSD項目は「正しい」「素晴らしい」「話しやすい」「美しい」「うれしい」「良い」などであった。これらの語句については、高齢者の道徳的・倫理的な側面を評価したものであると考えられる。高齢者は道徳的・倫理的であると評価する生徒は学習に対して興味・関心が高い傾向が捉えられる。また

図10-1 高齢者のイメージSD法と学習方法への関心

$p < 0.005$

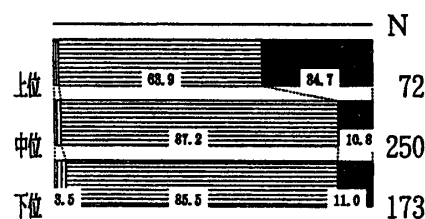
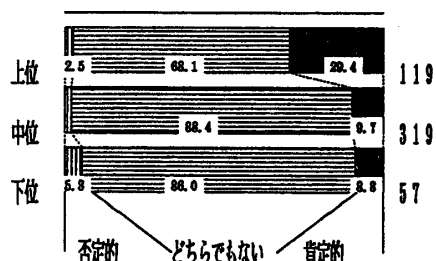


図10-2 高齢者のイメージSD法と学習内容への関心

$p < 0.005$



「高齢者のイメージSD項目」と「学習方法への関心」「学習内容への関心」のそれぞれの項目とのクロス集計をする、学習方法の項目のうち「高齢者と何かを作る」「施設訪問や手伝い」の項目が、学習内容では余暇と文化」の項目が最も高齢者イメージ有意な傾向がみられた。このことから高齢者のイメージを肯定的に持つ者は、高齢者の学習において、高齢者との交流や高齢者の知恵や生活の文化を学ぶことを希望しているといえることができる。

## V まとめ

以上の結果を要約する。

### (1) 基本的属性について

調査対象者の性別はほぼ同数の割合で、高齢化率によって区分した2つの地域もほぼ同数程度であった。祖父母との居住状況は約2/3が別居であるが、同居している祖父母についてみると、その9割以上の生徒は、祖父母との会話がある状態である。また祖父母との小さい頃の交流では、「食事を一緒にした」「褒めてもらった」などが多く、「一緒に遊んだ」「本を読んでもらったり字を教えてもらった」等は少ない傾向が見られた。高齢化の高い南部の地域に「仕事の手伝い」「昔の話を聞く」等の項目と有意な関連がみられ、祖父母との交流に生活や文化の伝承と結びつくものが存在した。

## (2) 高齢者観について

高齢者観を高齢者のイメージ「SD法」で測定した。高齢者について全体のプロフィールを描いてみると、やや肯定的イメージで捉えていた。また主成分分析より2つの主成分が抽出された。第一主成分は高齢者の「評価」第二主成分は「活動性」と考えることができる。第一主成分については肯定的イメージを、第二主成分についてはやや否定的なイメージを示した。イメージ平均値は、ニュートラルに近い平均値であり、それを中野ら<sup>8)</sup>の先行研究と比較すると、高校生は、小・中学生よりも高齢者に否定的イメージを抱いていることがわかった。

## (3) 学習の興味・関心について

高齢者に対する学習の興味・関心については、「学習方法への興味・関心」と「学習内容への興味・関心」の2観点から検討した。学習方法では、「体験学習」や「高齢者から何かを教えてもらって作る」学習方法に興味関心が高いが「調査・研究」、「ビデオや映画鑑賞」、「講演」等や間接的学習方法には、興味関心は低かった。学習内容項目については、「高齢者の心理」、「精神衛生」、「介護の方法」、「高齢者の余暇と文化」に関心が高いことがわかった。

## (4) 基本的属性と高齢者観との関連について

高齢者観をみる視点として「高齢者イメージ」と「祖父母との交流」については有意な関連も伺えた。祖父母との交流において、「現在の交流」で祖父母との会話が多いほど高齢者イメージは肯定的なイメージを示し、「過去の交流」でも肯定的イメージが有意な関連を示した。「小さい頃の交流経験」と高齢者観に関して、中野<sup>7)</sup>や馬場<sup>11)</sup>が小・中学生を対象に調査をおこなった結果調査があり、「過去の交流経験」が高齢者観に大きく影響を及ぼしていると報告している。今回、高校生を対象に行ったところ同様の結果になった。また単なる交流ではなく、生活に密着した生活文化の伝承的交流や祖父母からの愛情「褒められた」ことに特に強い関連を示していることがわかった。このことにより高齢者観を豊かにするのは、交流の「時期」と「質」によるものと考えられる。高齢者観「高齢者イメージ」と「性別」「地域」とに有意な関連は見られなかった。

## (5) 基本的属性と福祉・高齢者への学習意欲・関心との関連について

福祉・高齢者への学習意欲・関心と「性別」については有意な関連があり、女子は男子より学習意欲・関心が高いことがわかった。また福祉・高齢者への学習の「学習の方法」と「地域」とに有意な関連が見られた。「学習の内容」については全体として「地域」との関連は有意な傾向が見られなかったが、内容項目それぞれにはその関連がみられた。特に南部の高齢化率の高い地域において、学習の方法で、「施設訪問」や「車椅子の体験学習」に興味関心が高く、学習内容で、「高齢者の人間関係」や「経済生活」、「余暇と文化」とに有意な関連がみられ、高齢者から何かを受け継ごうとする文化的側面や生活を支える経済面に興味・関心が高いことがわかる。福祉・

高齢者への学習意欲・関心と「祖父母との交流」では有意な関連が見られ、「現在の交流」では、祖父母との会話を多く持つ者において福祉・高齢者への学習意欲・関心が高く、また「小さい頃の交流」が多く存在するものに学習意欲・関心が高くなる傾向を示している。

福祉・高齢者への学習意欲・関心と「祖父母との居住状況」には、有意な関連は、見られなかった。

#### (6) 高齢者観と福祉・高齢者への学習意欲・関心との関連について

高齢者のイメージと福祉・高齢者への学習意欲・関心との関連については、有意な関連がみられた。即ち、高齢者を肯定的にイメージする者の方に学習意欲・関心が高い傾向がみられた。また肯定的イメージをそれぞれの項目で分析検討すると高齢者の道徳的・倫理的な側面を認識しそのイメージの高い者に学習意欲・関心が高いことがわかった。また、高齢者学習内容においては、高齢者との交流や高齢者の知恵や生活の文化を学ぶことを希望していることがわかった。

以上より、祖父母との交流経験が多いほど、福祉・高齢者観が高いことがわかった。また高齢者の学習への興味・関心も高いことも判明した。特に小さい頃の祖父母との交流の中で、「褒められた」「昔話を聞く」「昔の遊びを学ぶ」「仕事の手伝い」などの交流が高齢者観に大きく影響を及ぼすことがわかり、交流の「時期」と「質」によることも判明した。しかし松村・中野<sup>12)</sup>によると、高校生の多く（7割弱）は、祖父母との交流の最も楽しかった時期は小学校低学年までであると、幼い時の交流を好意的に評価している。また中野<sup>7)</sup>の報告にも内実のある交流は幼い時ほど密で成長するにつれて次第に失われていくものかも知れないと述べられている。過去の交流経験をどのように捉えるかは今後もさらに検討が必要だが、小さい頃の経験が重要な関わりをもつことは確かである。さらに高齢者観と学習への興味・関心ともお互いに関与し、高齢者観の高い生徒は学習への興味・関心も高いことがわかった。高齢者観を正しくもっていないと、体験学習においても意味の無いものになってしまうと思われる。高齢者についての科学的認識を正しく持ち、学習活動に取り組むことが大切である。また、高齢者からの文化の伝承を受け継ぐことが稀少になってきている現在、地域の文化や体験を受け継ぐことの重要性は今後ますます大きくなると考えられる。高齢者との交流によって高齢者についての理解を深め、高齢者から生活文化を感じ取っていくことが大切ではないだろうか。このような視点を家庭科教育に取り入れていくことの重要性が捉えられた。

## 引用・参考文献

- 1) 古川孝順編「社会福祉供給システムのバラグラム転換」誠信書房1999年P 8
- 2) 守屋国光「女子短大生の老人像」目白学園女子短期大学紀要11 1974年P83～90
- 3) 大久保美恵子・井上勝也・鳶政和「老年期のイメージ」日本老年社会学会第17回P43～44
- 4) 井上勝也・長嶋紀一編「老人心理学」朝倉書店P188～202
- 5) 保坂久美子・袖井孝子「大学生の老人イメージ」社会科学27 1989年 P22～33
- 6) 保坂久美子・袖井孝子「大学生の老人像」社会科学 8 1986年 P103～116
- 7) 中野いく子「児童の老人イメージ」社会科学34 1991年 P23～27
- 8) 中野いく子・冷水豊・中谷陽明・馬場純子「小学生と中学生の老人イメージ」社会老年学 39 平成 6 年 P11～22
- 9) 竹田久美子・細江容子・袖井孝子・鄭淑子・徐丙淑「日・台・韓大学生の老人に対する態度と老後責任意識に関する研究（第3報）大学生の老人イメージ」日本家政科教育学会誌vol45 No. 5 405～413 (1991)
- 10) 荒井紀子他「児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因」日本家政科教育学会誌 vol39 1号
- 11) 馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明・「中学生の老人観」社会老年学38 平成 5 年 P 3～12
- 12) 松村孝雄・中野いく子「老人の家庭内役割：孫のしつけの実態と機能に関する研究」昭和59年度科学研究費補助金研究成果報告1985年